

メッセージアウトライン マタイの福音書5：33～37 「偽って誓ってはならない」

[33]「また、昔の人々に対して、『偽って誓ってはならない。あなたが誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています」

「偽って誓ってはならない」という言葉は旧約聖書のレビ記19:12に書かれており、「あなたの誓ったことを主に果たせ」という言葉は民数記30:2節や申命記23:21の言葉の要約であり、それ自体では正しいことであるが問題は「誓い」の内容である。レビ記19:12には「あなたがたは、わたしの名によって偽って誓ってはならない…」とあり、民数記30:2では「男が主に誓願をするか、あるいは、物断ちをしようと誓う場合には…」とあり、申命記23:21では「あなたの神、主に誓願をするとき、…」とある。それゆえ、これは何かを誓うときは「主なる神の名によって誓ってはならない」という教えであることが分かる。要するに、神にかけて誓うと言ってはならないのである。

しかし、律法学者やパリサイ人たちはここでも聖書のこじつけ、曲解、誤った解釈をする。すなわち、主の名によって誓ったら、それは破ることができないが、それ以外のものによって誓ったならば、それは破ってもよい誓いであると考えた。それゆえ供え物とか祭壇とか神殿など、あるいは天や地を指して誓った場合には、それは破ってもよい誓いだというのである。

それに対してイエスは彼らの解釈を非難し、正しい聖書解釈を示される。

[34-36]「しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地にかけて誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムにかけて誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。自分の頭にかけて誓ってもいけません。あなたは髪の毛一本さえ白くも黒くもできないのですから」

私たちは、しばしば些細な問題についてもすぐに誓いをするという傾向がある。「あの店のラーメンはとてもおいしい。ほかの店にはない絶品だ。誓ってもよい」「あの整体治療の先生はすごい。どんな腰痛や体の不調でも直してしまうゴッドハンドを持っている。本当に誓ってもよい」「お金を貸してほしい。ボーナスが入ったら必ず返すから。誓うよ！」等々…。

しかし、この「偽って誓ってはならない」という言葉の聖書の本当の目的は、どんな小さなことにも見境なく、軽々しく誓うということをやめさせることにあったのである。本来、誓いとか誓約というものは極めて厳粛なものである。それらは重大な事件や特別な事柄に限られなければならない。それを日常生活の茶飯事にまで軽々しく持ち込んでいたのが当時の時代であった。

これに対してイエスは、天も地もエルサレムも自分の頭にかけても誓ってはならないと言われる。なぜならすべてのものは神のものであり、人間自身も神によって造られたものであるからである。何一つ神と無関係なものはない。それゆえ、何を指して誓った誓いでも、これなら破ってもよいというようなものは一つもないのである。

[37]「あなたがたの言うことは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです」

ここを読むとイエスはあらゆる誓いを禁じておられるようにとれる。しかし、そのように考えることは実はまた、律法学者やパリサイ人たちの道に続くことになる。聖書を読むときの原則はその読んでいる一か所だけで分かりにくい時は前後の文脈から照らし合わせて、またその福音書や手紙がかかれた意図、目的、他の聖書箇所との関係、旧約聖書との関係といったことから総合的に判断する必要がある。

ある人々はここで言われている聖書の箇所を文字通り取った。そしてそれを実行した。彼らはどんな時にも誓わなかった。重大な裁判が行われる法廷においても誓わなかった。まことに堅苦しく彼らはこの戒めを文字通り実行したのである。しかし、私たちはそのような解釈を受け入れることはできない。私たちはこのことについて第一に知らなければならないことは聖書の他の箇所でも絶対にどんな時でも誓ってはならないと書いてあるのかということである。旧約聖書においては創世記 24:1~9でアブラハムは息子イサクの妻となるべき女性を捜すために、しもべを自分の出て来た親族の地ハランに送り出す時に何よりもまずしもべに誓わせた。→創24:1~9 父ヤコブは息子ヨセフに自分が死んだらカナンの地にある墓に葬るように誓わせた。→創50:5 イスラエル人がエリコの町攻略の折に偵察のために送られた二人の斥候をかくまった遊女ラハブの求めに答えて、彼らは彼女とその親族を救い出すことを誓った。→ヨシュア記2:12~20 「損になっても、誓ったことは変えない」→詩篇15:4、「あなたの誓いをいと高き方に果たせ」→詩篇50:14、「するとペテロは、嘘ならのろわれてもよいと誓い始め…」→マタイ26:74 このように誓いは重

大な局面においてしばしばなされていることが分かる。

それゆえイエスはこの山上の説教で、いついかなる時でも決して誓ってはならないと教えてはおられないということが分かる。これらのことから教えられることは、誓いとはむやみやたらにするべきものではないが、しかし、ここ一番という重要な時、厳粛で重大な場合には誓う、誓約するということが正当なことなのである。クリスチャンの結婚も神の名にかけて誓うことから始まる。結婚とは天地の造り主なる神を証人に迎える、人生の重大事なのである。その他色々な重要な場合に私たちは誓う必要を持つのである。

しかし、ではどんな時に私たちは誓ってはいけないのか。それはイエスが教えておられるように、天も地も、エルサレムも、自分の頭も、つまり神の造られたすべての被造物にかけて誓ってはならないのである。それらはすべて神の支配下にある。これはダメであれなら良いという区別はない。さらにまたイエスは37節で言われるように日常会話において誓うことも禁じておられる。日常生活においては何事も権威付けのためにいかにも重大であるかのように誓ったりする必要はないのである。それらは単に「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」で終わらせることが求められている。

「それ以上のことは悪い者から出ているのです」とは簡単に事実だけを言えばよいものを、それを小細工してことさらに誓ったりすることは真実をぼかそうとする不誠実な悪い心から出てくることを示している。特に未来のこと(世の終わりの時、キリストの再臨の時等)に関しては私たちには未来のことは分からないのであるから、それを誓って断言するようなことは自分を預言者であるかのように誇ろうとする悪しき心から出てくるものである。私たちは将来における自分の歩みにおいても、ただ神のみこころと導きと守りを信じ、誠実な思いで「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」として偽りのない心で日々の歩みを進めていき、ここ一番これが大切というときには誓いをもって答えるという生き方こそが信仰者として大切な生き方なのである。

神の言葉であるこの聖書は誠心誠意、真実な神の契約で貫かれている。そしてその誠実な神の契約によって、救い主イエス・キリストがこの世に来られ、私たちの罪の贖いのために十字架への道を進まれたのであった。神が人との契約において誓われたことは、祝福であれ、さばきであれ、まさにその通りになった。→創世記17:1~8、ヘブル6:13~17、イザヤ54:9~10、エレミヤ22:4~5、51:11~14

もし私たちが誓うということにおいて軽々しい考えを持つならば、聖書に書かれ

ている神の約束に対しても同様であるかもしれない。しかし、私たちが聖書に書かれている神の約束について心から信じ、いっさいの約束とことばとに真実であろうとし、偽り誓うことなく、日々の生活において、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とする単純率直、真実で誠実な生き方をしていくならば、嘘や偽りに満ちたこの世の多くの問題やトラブルは解決に向かい、私たちは地の塩、世の光としての役割を果たしていくことができるであろう。→マタイ5:13～16 I コリント6:19～20